

食糧支援 ニュースレター



TOPICS

- 「アフリカの角」食糧危機
- 富永愛さん エチオピアを訪問
- 「RED CUP CAMPAIGN」がスタート!
- パキスタンで再び大洪水が発生 緊急食糧支援を拡大
- 私たちのWFP支援 ソフトバンクモバイル株式会社
- 「WFP エッセイコンテスト2011」開催報告

「アフリカの角」食糧危機



アフリカ東部の「アフリカの角」と呼ばれる地域が、過去60年で最悪とも言われる大干ばつや紛争の影響などにより、深刻な食糧危機に陥っています。地域全体で1,300万人が被災し、ソマリア南部では最も深刻な飢餓を意味する飢饉が発生。多くの人が命の危機に晒されています。

WFPは、ソマリア、エチオピア、ケニア、ジブチ、ウガンダの5カ国で緊急食糧支援を展開し、10月までに計770万人に支援を届けました。配給した食糧は、穀物、豆、植物油、塩、砂糖、高カロリービスケットなどです。また、子どもの栄養不良を防ぐ事に力を入れ、栄養価の高いピーナッツペースト等、子ども用に

特別に作られた栄養強化食品も配りました。さらに、ソマリアの首都モガディシュでは、23カ所の炊き出し所と6つの病院で炊き出しを行っています。1,100万人への緊急支援を目指し、現在急ピッチで支援を拡大しています。

今年末までは次の収穫は望めなく、危機的状況は長引くと予想されます。同地域での活動に対し各国政府や民間企業、個人から5億9,000万米ドルが寄せられましたが、来年3月まで支援活動を行うには未だに1億650万米ドルが不足しています。被災者の命と生活を守るため、温かいご支援をよろしくお願いいたします。

富永愛さん エチオピアを訪問



食糧を受け取りに来た干ばつ被災者たち。

この10月、WFPオフィシャルサポーターを務める富永愛さんが、食糧危機に苦しむエチオピアを訪問しました。

WFPはエチオピアで、干ばつ被災者や難民を含む総計700万人を対象に支援を行っています(緊急支援・中長期的支援の対象者すべてを含む)。



オロミヤ州の食糧配給所に到着した富永さん。



最初に富永さんが訪れたのは、首都アディスアベバから車で3時間半、オロミア州の農村部にあるレガバ食糧配給所です。到着するとロバが何十頭もあり、富永さんは「ロバの競り市かと思った」と驚きの表情。遠い人だと40キロ離れたところから食糧を受け取りに来るため、皆、背に乗せて食糧を持ち帰るため、ロバを連れてきていたのです。

この地域は、昨年から今年にかけて大雨と干ばつが相次いで発生し、2度の収穫が連続して不作に終わりました。かんがい設備を持たず、雨水に頼った農業をしているエチオピアの農村部にとっ

て、干ばつは大きな打撃でした。さらに、食糧価格が高騰し、追い打ちをかけました。WFPはここで、特に食糧難の人たち(人口の10%程度)に対し、小麦や、栄養強化食品などを配っています。

この日食糧を受け取りに来たムクター・ゲリーズさんは、3人の子どもの父親です。「干ばつで作物が収穫できず、生きていくだけで大変です。子どもには勉強してほしいのですが、家の仕事を手伝ってもらわなければならない。学校に行かせられません。学ぶ事が出来れば未来が開けてくると思うので、ぜひ支えてください。」と、切実な状況を訴えてくれました。

人々は薪を売ったり、出稼ぎに行ったりして、何とか生計を立てようとしています。しかし、過酷な生活が続いています。「人が太刀打ち出来ない様なひどい状況で、見ていて辛かった。しかし、WFPの食糧が多くの人達の助けになっている。食糧を受け取る彼らの嬉しそうな顔が忘れられない。なんとか支援したい。」と富永さんは言います。

PHOTOS

1 小麦が入った袋をかつく受給者。2 配給された小麦。3 ロバの背に食糧をくくりつけて持ち帰る。4 子どもの将来を案ずるムクター・ゲリーズさん。



翌日は、オロミア州の牧畜地域にあるダンディ・グッディナ小学校を訪ねました。この地域の人々は、ヤギ、牛、ラクダなどを飼って牧畜を営んでいますが、干ばつで牧草が生えなかったり飲み水が干上がってしまったりして、多くの家畜が死んでしまいました。

現地には砂埃が舞い、植物もまばらにしか生えていません。ラクダ以外の家畜は見られず、乾燥した風景が広がります。「これ以上乾いている状況を想像できない。」と富永さん。しかし、聞いてみると、訪問した時期が一番、水や緑が多い時期だとのこと。干ばつの深刻さが伝わってきました。

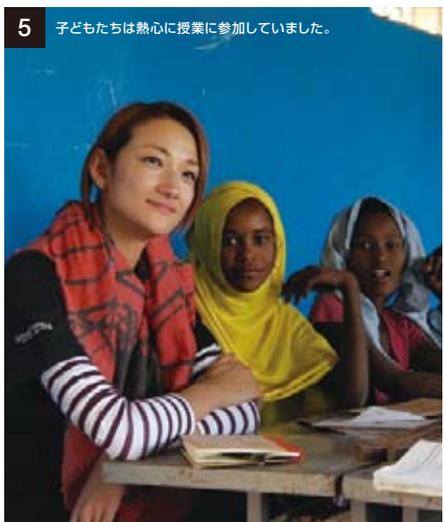
この学校で富永さんは、WFPによる学校給食の様子を視察しました。給食が一日の唯一の食事という子どもも多く、子ども達は学校に着いた時点でお腹を空かせているので、朝10時より、トウモロコシと大豆の粉で作ったおかゆを提供しています。2005年に給食が始まって以来、同校では就学率・出席率の向上、中退率の減少、女子生徒の増加などの目覚ましい効果が見られました。

富永さんとお話したいと手を挙げた少女アミナちゃんは、13歳で5年生。富永さんが将来の夢を尋ねると、「私は両親のような大変な暮らしをしたくありません。だからたくさん勉強をして大学に行

き、医者になって自立し、病気の人を助けたいです。そしてこの村に帰ってきて、この村の生活をもっとよくしたいです。」と答えました。困窮した生活からの脱出を目指す彼女の強さがとても印象的だったと言う富永さん。子ども達は過酷な状況の中でも、生きる為の力に満ち溢れていると感じさせられました。

PHOTOS

1 ダンディ・グッディナ学校。2 給食は生徒の母親たちが半ボランティアで調理している。3 給食を食べながら、将来の夢を聞かせてくれたアミナちゃん(中央)。4 はじめはシャイな子どもたちも、富永さんにすぐ馴染んで大喜び。



Photos: mayumi rui

「アフリカの角」緊急募金にご協力ください。

クレジットカードで

WFP ホームページ www.wfp.org/jp

24時間受付。使途選択で「緊急支援」をご選択ください。

フリーダイヤル **0120-496-819**

12月1日から電話でも受付中。携帯電話からもつながります。
受付時間 9:00~18:00
(年末年始 12月31日~1月3日を除く毎日)

携帯電話

※募金使途欄にて「緊急支援」をご選択ください。

手数料無料振込口座から

三菱東京 UFJ 銀行

店名	本店(店番 001)
口座種別・番号	普通預金 0887110
口座名	トクビ コクレンWFPキヨウカイ

※領収書発行につきましては、国連 WFP 協会までご連絡ください。

ご利用いただけるクレジットカード



最終日は、標高3,000メートルの高地にあるオロミヤ州の村を訪れ、環境保全や防災のための中長期的な支援活動を視察しました。

この村では、数十年前までは豊かな森が広がっていましたが、薪や農地拡大のための森林伐採や連作などにより土地が荒れ、大雨が降るたびに土壌が流出するようになりました。養分の多い表土が流れてしまうことによって農作物の収穫量が減少し、また土砂によって家や作物が押し流されるなどの問題が起きていました。

WFPはこの村で環境保全・防災のための活動を後押ししています。まず住民は、大雨の際に水や土壌が山の斜面を一気に流れ落ちてしまうを防ぐた

め、斜面に何本もの石垣をつくりました。石垣作りに参加した住民には、労働の対価としてWFPが小麦を配りました。この石垣が雨水をせき止めるようになると、その水が地中に浸透し、村には湧水が出るようになりました。また、養分の多い表土もせき止められ、家畜のえさや現金収入になる植物を栽培することができるようになりました。

支援開始時の様子を尋ねる富永さんに、「最初は、役に立つのかどうか疑問に思い、協力するのは嫌だと思った。」と住民、ダファーシャ・レンジソさんはいいます。日々の暮らしに追われる人々が、まだ起こらぬ危機に備えて行動を起こすのは容易ではなく、理解を得るには時間がかかりました。しかし、緑が茂り水が湧き出て、作物がよく育つようになると、村人の

間には、環境を守ることが自分たちのためにもなるという意識が芽生えたそうです。

干ばつや大雨などの自然災害が起きた際には、命を救い、今日の食べ物を保障するための緊急支援が必要です。一方で、災害が起きないようにする、あるいは起きても被害を最小限に食い止められるように備えを促す中長期的な活動も必要です。今回の視察では、その二つのタイプの支援活動がそれぞれに重要であることがわかりました。

PHOTOS

1 標高3,000メートルの高地にあるガーラバリ村。
2 村の女性が歌と踊りで歓迎してくれました。3 洪水の勢いを弱めるダムも設置。4 石垣造りに参加した住民。

エチオピア訪問を終えて



子どもたちと。
Photos: mayumi rui

富永さんは、困難の中にあっても、力強く、共に支えあって懸命に生きている人々に会って、逆に元気をもらったといいます。「人間の尊厳が奪い取られる程の飢餓に直面している人達が大勢いる事を知ってもらいたいです。まずは知る事が大切です。日本は日頃からアフリカ支援に力を入れているけれども、東日本大震災発生後、アフリカからも多くの励みや援助が届いています。その繋がり深さをもっと多くの人に意識して欲しいと思います。」と、富永さんは呼びかけています。

エチオピア訪問の様子は今後、視察に同行した写真家、まゆみ瑠衣さんの写真とあわせ、WFPホームページ、「RED CUP CAMPAIGN」サイト、富永さんのブログなどで紹介されます。

富永さんからのメッセージ

「RED CUP CAMPAIGN」がスタート!

国連WFP協会は、「学校給食プログラム」への支援を強化するため、11月1日より「RED CUP CAMPAIGN」を開始しました。

同キャンペーンでは、企業各社に、WFPの学校給食を支援する「寄付つき」キャンペーン商品の販売などを通じてWFP支援の輪を拡大していただくとともに、多くの皆さんに、世界の子どもたちが直面する飢餓の問題を理解して協力いただけるように、働きかけます。

キャンペーン始動にあわせて11月1日より、「RED CUP CAMPAIGN」専用ウェブサイト(www.redcup.jp)をオープンしました。同キャンペーンサイトでは、WFPが給食配給の際に用いる「赤いカップ」をモチーフにしたオリジナル携帯ストラップを、「WFPマンスリー募金」に新規で加入くださった方々、または既存のマンスリー募金支援者の中で増額くださった方々にプレゼントし、継続的な支援者を募集しています。

また、登場するキャラクターが「赤いカップ」を入手するとパワーアップする、FacebookとTwitterで楽しめる雪合戦ゲーム「SNOW PLAY」や、WFPの活動について学べるクイズも用意し、全問正解した皆さんに同サイト限定の「RED CUP CAMPAIGN」壁紙をプレゼント中です。

国連WFP協会は、飢えと貧困に苦しむすべての子どもたちが、飢えることなく、健全に成長し、学び、貧困を克服できるように、「RED CUP CAMPAIGN」を通じて、様々な働きかけを行います。私たち1人ひとりの力で、給食が1人でも多くの子どもに届く、世界がより良くなっていく、それが「RED CUP CAMPAIGN」の願いです。ぜひ、「RED CUP CAMPAIGN」にご協力ください。



「RED CUP CAMPAIGN」ウェブサイトのイメージ
©JAWFP

オリジナル携帯ストラップをプレゼント中。



パキスタンで再び大洪水が発生 緊急食糧支援を拡大

昨年、未曾有の大洪水に襲われたパキスタンは今夏、再び大洪水に見舞われました。水はようやく引き始めましたが、作物が被害を受け、未だに孤立している地域も多いことから、被害の大きかったシンド州とバロチスタン州ではおよそ300万人が食糧支援を必要としています。

WFPは、9月12日に支援を開始して以来、毎日新たに5万人ずつ食糧の受給者を増やすという目標を立てて急ピッチで支援を拡大し、10月末までに280万人へ食糧を届けました。配っているのは、栄養強化小麦、豆、塩、植物油です。

また、この地域は今回の災害が起きる前から特に子どもの栄養状態が悪かったことから、12歳未満の子どもには通常の食糧以外に、高カロリービスケットや、栄養が豊富な「ワマム」という地元産のヒヨコ豆ペーストを届けました。「ワマム」とはパキスタンの現地語で「おいしい」という意味。WFPが6～23カ月の子どもの栄養不良の改善や予防のために開発したもので、調理を必要とせず袋からそのまま食べることができます。



©WFP / Amjad Jamal

さらに、WFPはシンド州において、連携機関と合同で子ども5万6,000人と妊婦・授乳中の母親3万7,000人を対象に栄養状態の調査を行いました。

また、WFPは陸路でのアクセスが困難な3つの地域へ、17隻の船を利用した支援を行いました。これらの船は、洪水により孤立してしまった人々への移動医療サービスの提供や、救助・避難作業に使われました。

WFPは、今回の洪水被害を受けての緊急支援には、1億3,300万米ドルの活動費が必要と試算しています。しかし、10月末現在、各国政府や民間企業などから寄せられた拠出金は、必要額の2割程度に留まっており、資金が底を尽くことが懸念されています。

洪水で被災したパキスタンの人々を救うため、温かいご協力をよろしくお願いいたします。

私たちのWFP支援 ソフトバンクモバイル株式会社

ソフトバンクモバイルは、2006年より5年以上にわたって、WFPを支援する「チャリティダイヤル」を展開しています。これは、ソフトバンクの携帯電話より「*5577」にお掛けいただき、音声ガイダンスでWFPを選択していただくと、WFPに関する情報が月替わりで流れ、通話料がソフトバンクモバイルを通じて国連WFP協会に寄付される仕組みです。これまでの寄付金の総額は、11,730,554円に上っています。



財務経理本部の平野さん(右)とCSR企画部の八木さん(左)

WFP情報は、毎月、ソフトバンクモバイルの社員ボランティアによって読み上げられ、収録されます。2011年11月分の原稿を担当して下さった、財務経理本部 収益プロセス管理部の平野裕美さんにお話を伺いました。

—世界の飢餓について、どう思われますか。

「食する」という事は生きて行く上で最低限な事だと思います。今回の収録を通じて、食べることができない国や地域がまだあるという現実をあらためて知り、胸が痛みました。

—ボランティアとして参加している理由を教えてください。

多くの人に世界の現状をお伝えすることで、「力になりたい」とか、「協力したい」という方が1人でも増えたら、と願っています。東日本大震災で日本が見せた団結力や優しさを、国際支援の面でも発揮できれば、素晴らしいと思います。

—今回は、「アフリカの角」地域の食糧危機に関する内容でした。

深刻な食糧危機により、たくさんの幼い命が危険にさらされているというのは、心苦しい事実だと思います。「子どもを守りたい」という親の気持ちは世界共通であることを、心から感じました。WFPには、多くの命を救う活動を続けて頂きたいです。

「チャリティダイヤル」を担当している総務本部 CSR企画部の八木真実子さんは、「この活動を通じ、私たちが普段接点のない世界を知る事ができ嬉しく思っています。今後も、携帯電話から簡単に寄付できる仕組みの提供を通じて、WFPを応援していきます。」と語っています。

「WFPエッセイコンテスト2011」開催報告



© WFP / Rein Skullerud



竹下景子
国連WFP協会
親善大使

© アイ・バーグマン

国連WFP協会は今年度、「食べる」を考えるをテーマに「WFPエッセイコンテスト2011」を開催し、8月1日から10月15日までの期間、小学4年生以上の方を対象に作品を募集しました。9,896通もの様々な想いが詰まった作品が寄せられ、厳正なる審査の結果、最優秀賞にあたるWFP賞に、秋田県横手市立増田中学校1年・稲垣真於さんの「3月10日のリンゴ」が選ばれました。国連WFP協会親善大使の竹下景子さんが同受賞作品を朗読し、その動画はエッセイコンテスト専用ウェブサイト(www.wfp.or.jp/essay)で公開されています。サイトでは、その他の入賞作品も掲載されていますので是非ご覧ください。

また、応募1作品につき、給食一食分の30円が特別協賛社から寄付される仕組みになっています。その結果、寄付額は296,880円となり、学校給食プログラムを通じておよそ1万人の子ども達に栄養たっぷりの給食を届けることができます。ご参加・ご協力をいただき、本当にありがとうございました。